

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

2019年7月、現在、福島県浜通りを主に支援活動をしているシスター方の集いが、福島県南相馬市のカトリック原町教会を会場に、初めて開かれました。初めての集いということで手さぐり状態ではありましたが、幸田司教様のお話しを中心に分かち合いも行われ、皆さん実りある時間を過ごされ、次回の集いが、2020年1月に開かれることも決定しましたので、その様子をご紹介します。

震災前、修道女が全くいなかった地域に、今では10名を超えるシスターが支援活動に携わりながら生活し、小教区の活動へもご協力くださっていることは、仙台教区として大変心強く、改めて、修道院開設やシスターの派遣をしてくださったことに感謝いたします。

また、暁星高等学校は、震災直後の夏休みから、この8年間継続してカリタスペースでボランティア活動をしてくださっています。今年もカリタス南三陸でボランティア活動に参加した生徒の皆さんから感想が寄せられましたので、ご紹介します。8年前、震災直後の夏休みは、受け入れできないほどのボランティア申し込みがあり、学生の皆さんはじめ多くの方が入れ替わり立ち替わり、津波被災を受けた家や土地の泥かき、避難所などでの傾聴やお湯出し、写真洗浄などの活動をしてくださいました。今では、活動内容も変わり、たくさんのボランティアを受け入れられるカリタスペースも少なくなりましたが、震災を忘れずに、被災地に足を運んでくださる方々が今もいることに力をいただいています。

福島のこの地で福音宣教を考える～浜通りのシスターの集い～

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

2019年7月15日、12時に、カトリック原町教会を目指して三々五々、いろいろな修道会のシスターたちが集まってきました。この集いと呼びかけたのは、東京教区名誉司教で、現在福島・カトリック原町教会を司牧してくださっている幸田和生司教。福島の浜通りで支援活動をしているシスターたちと、福音宣教について共に考えていこうということで集まったのです。

参加者は、マリアの宣教者フランシスコ会のシスター2人。聖霊奉侍布教修道女会（以後、「聖霊会」と略称）のシスターと南相馬でボランティア活動中の志願者の計2人。援助マリア修道会のシスター3人は、南相馬市小高区に修道院を昨年開設し、聖心会のシスター2人は、ベースを中心に活動をなさっています。4年前に檜葉町に修道院を開設した、聖母訪問会の2人のシスター、それに仙台から加わったシスター1人が参加しました。



昼食と自己紹介の後、幸田司教はまず、「宮城県南を含む福島県浜通りには、東日本大震災が起こる2011年3月11日までは、一つの修道院もなく、一人の修道女も住んでいませんでした。それが、今はここに集まっているシスターたちが大勢いらっしゃいます。皆さん、3.11以後、この地に来て、住み、働くようになりました。それぞれの修道会に固有の使命、考えがあるのは当然のことですが、その中で、どこかでつながりながら、この地での福音告知活動について、一緒に考えていければと思い、最初の試みとして、このような集いを計画いたしました」と目的を紹介されました。

次いで、幸田司教は、6月29日に東京のカトリック麹町教会で開かれた「日本宣教会」の全国研修会で、「今、問われている『希望』：災害の問題を宣教学的に考える」というテーマで講演したことを、何かのヒントになればと、話されました。その一部をご紹介します。

キリストの受難とつながっている

東日本大震災など大きな災害に直面するとき、キリスト者は、これはどこかでイエスの受難につながっていると思います。震災・災害の被災者や犠牲者をどう考えたらいいのか。苦しみの意味は何か、災害による死の意味は何か。なぜ、こんなひどいことが起こるのか、神はどこにいるのか。これらの問いは説明できないものです。

教皇ベネディクト16世が東日本大震災に遭った7歳の女の子の、「どうして日本の子どもは、怖くて悲しい思いをしなければならないのですか」という質問に答え、「私も自問しており、答えはないかもしれませんが、十字架に架けられたキリストも無実の苦しみを味わっており、神さまは常にあなたの側におられます。悲しみは、消えないでしょう。しかし、世界中の人たちがあなたたちのことを思っており、私は苦しむ日本のすべての子どもたちのために祈ります」と答えられたように、説明できるものでも、また説明したらよい、というものでもありません。

ただ言えることは、キリストの受難とつながっている、と考える事が大切だと思います。たとえば、カトリック教会は、「幼子殉教者」の祝日を、12月28日に祝います。ベツレヘムとその周辺一帯にいた物心もつかない2歳以下の男の子たちは、キリストも知らず、洗礼も受けていませんが、これらの幼子たちをキリストの誕生と引き換えに命を落とした殉教者として祝います。これは、キリストを知らず、洗礼も受けずに亡くなられた多くの人の救いにつながっていきます。そして、私たちカトリック信者は、キリストを知らず、洗礼を受けずに亡くなられた人も、神のいつくしみによって救いが与えられると信じています。



神が被災者と共におられることのしるしとして、私たちがいる

私たちは被災された方の苦しみや痛みを分かち合いたいと思っていますが、人の痛みは分かり得ないもの、知り得ないものだと感じています。しかし、その人々に、寄り添っていきたいのです。「寄り添う」ことのキリスト教的意味について考えた時、以前、私が見たお芝居「ダミアン神父」を思い出しました。

ダミアン神父は、ハンセン病を患っている人が、船でハワイのモロカイ島に送られている事実を知り、自分もこの人々がいる島に行きたいと司教に頼みました。司教は初め反対しましたが、ダミアン神父はこうに言いました。「神がこの人たちを忘れていないということの『しるし』として、一人の司祭が必要なのです」と。私たちも同様に、被災者の方々に寄り添っていますが、それは、神が被災者と共におられることのしるしとして、私たちがいるのだと思っています。

マタイ福音書の 25：31～46 に、「この最も小さい一人にしたことは、私にしてくれたことなのである」とあります。

イエスは飢え渴き、裸であり、旅人である人と連帯し、同一視なさいます。イエスはその人々とご自分を同一視しておられるのです。

私たちの使命「イエスが今ここにいたらどうなさるか？」

被災地で被災者と共に暮らすということには、教会の宣教活動と密接な関係があります。それは、復活したイエスが弟子たちに何とおっしゃっているかを見ると、よく分かります。どの福音書においても、イエスは宣教をなさい、すべての人を、私の弟子になさい、あなた方が、言葉だけではなく、生き方を通して私の証人となりなさい、「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わす」、とおっしゃいました。

結局、弟子たちの宣教の使命は、イエスの使命の継続なのです。ですから、私たちの使命も、「イエスが今ここにいたらどうなさるか？」ということに尽きます。「イエスが、今ここにおられたならば、どうなさるだろうか」。これを問いかけながら私たちはやっていくのです。これは、結局、私たちがイエスをどう理解しているか、ということにつながっています。

イエスの持っていたらっしゃった確信は、神はアッバ Abba（幼児語で「お父ちゃん」）、ということでした。そこから、すべての人は神の子であり、互いに兄弟姉妹という考えがでてくるのです。

すべての人が神の子なら、イエスと同じように、御父をアッバと呼び、私たちも同じようにしていかなければなりません。具体的にイエスは、「安息日に病人を癒す」「罪人と一緒に食事をする」ことを通して、苦しむ人と共にいる神を表されたのです。すべての人が神の子としての尊厳を生きることができるよう、イエスは苦しむ人々を大切にしました。

私たちは、被災者に何かをしてあげるのではありません。被災者の尊厳を守ることが大切です。キリスト教は愛ということばを使いますが、愛はしてあげるものではありません。愛は相手を尊重することです。

ジャン・バニエの言葉に次のような言葉があります。

「人を愛するとは、その人自身の美しさを自分で発見させ、見せてあげることだと思います。その人の存在する場所を作ってあげることです。あなたは大切な人であり、あなたには価値があると、その人自身に示してあげることです」と（『心貧しき者の幸い』あめんどう刊）。



集いに参加した幸田司教とシスターたち

地域とともに歩む教会

私たちのキリスト教共同体が被災地にあることの意味を考えてみましょう。これは、地域とともに歩む教会でもあります。

震災前は、地域の人々はほとんど教会に来てくれませんでした。教会というのは、特別な人たちがお祈りに行く場で、地域の人にとっては、何の意味もなかったのです。これは、震災を機に変わり始めました。周囲の人々、地域の人々を助けながら、周囲の人々、地域の人々から助けられる存在になり始めました。一緒に泣いたり、笑ったりしながら生きていく。特に、キリスト信者でない人々と共に生きていく存在になりました。

ここから、新しい教会共同体作り、つまり、すべての人との連帯ということに向かう共同体作りが行われます。すべての人ということは、つまり、ハンディを持っている人々、外国人、高齢者、病気の人々など、だれも排除しないということです。

苦しみ、死、喪失の体験と教会の使命、これは、「生きている意味」を問う使命です。被災者は、震災で亡くなった人は大勢いて、その中で自分は生きている、いや生かされていると感じています。現状は、被災者が属していたもとの共同体は、バラバラになってしまい、今の自分が属する共同体を模索し始めている人々が大勢いらっしゃいます。私たち人間は、根本的に神のいつくしみによって、生かされている、そう感じられれば、そこから来る安心感・心の平和が生まれるものです。

苦しみ、死、喪失の体験と教会のミッション

私たちは根本的に自分が生きている以上に、神によって生かされているということを知っています。こういうことを分かち合っていきたいのです。ここに、災害ボランティアに来る人々も、生きる意味を探し求めていると感じることがあります。

使命に生きる人々の霊性は、すべての人（他宗教の人）を尊重すると同時に、キリストに徹底的に従う。これが、マザーテレサが指し示したものです。私たちも、宗教の違う人も尊重し、キリストを徹底的に生きなければなりません。



幸田司教のお話し後、参加者の体験に基づいた分かち合いが行われました。発言したどのシスターも、何かをすることではなく、共に住む、一緒にいる、生きることが自分たちの使命だと認め、奉獻生活を生き生きと生きておられることが伝わってきました。

そして、次回開催日を確認した後、集いの最後はミサでしめくられました。この日の聖書朗読に「神を畏れる人」が語られており、幸田司教が次のように結論づけるとともに、参加者を励ましてくださいました。

「『神を畏れる』とは、別の言葉で言えば『神以外のなにものをも恐れない』ということです。これはすごいことだと思います。ここには、『神を畏れる人たち』がこんなに大勢おられます。何者も恐れない人々が。」

福島第一原発事故の地に、私たちはいます。神を信頼し、精いっぱい神の証し人として生きることが出来ます。私たちは、キリストの証人として、恐れることなく進んでいきたいと思っています」。

僕は初めてボランティアというものに参加した。

今回行った宮城県南三陸町は、震災の津波や地震による被害を多く受けている土地で、まだその痕跡を残している場所と新たに建物などが建っている場所をボランティア先に向かう途中や、先生に案内してもらうことにより、被災地の昔と今を並べて交互に見ているような気持ちになった。

今まで僕は、東日本大震災の現地の情報をメディアを通してでしか知らなかったし、知ろうとしなかった。しかし、長さんという方のところで昆布結びの作業をする時に「震災があったからこそ今復興できている。もし震災がなかったら潰れている店もたくさんあるだろうから震災はあってよかった」と話してくださった。長さんも身近な人を亡くしているのにもかかわらず、このようなことを言うことに僕はひどく動揺したが、この言葉の裏にはポジティブに捉えなければやっていけないという意味が隠されているように思えた。

先生に案内してもらった旧石巻市立大川小学校や高野会館では、津波が来た時の状況を表すパネルなどがあり、被害を受けた方の中には一刻も早く取り壊してほしいという気持ちがある人もいると思うが、後世に伝えていかなければいけないという思いを感じた。

まだ震災による被害を間接的に受けている人は山ほどいると思うし、反対に長さんのように震災をポジティブに考えて前に進む人がある。どちらがよいとは僕たちが言えることではないけれど、ボランティアとして作業に取り組むことだけではなく、その人たちに「寄り添う」ことがボランティアの最も大事なことだと思った。（高2 K.K）



漁師の佐藤長治さん(通称「長さん」と)と暁星高校の生徒たち

震災から8年。さぞ復興は進んでいるだろうと思っていた。南三陸に着いた時、なんて浅はかなことを考えていたのだろうと気付かされた。工事も継続中、仮設にまだ暮らす人々も少なくない。そして、圧倒的に人が少ない。昼間でも人通りがほとんどない。新築の住居が高台に多く見られた。豊かな漁場や高台移転も働き手、住人が少なければ活かされず衰退しかねない。東京に暮らす僕が大きなことは言えないが、この現実を心に留めた。人々を呼び戻す手立てが必要なことは確かだ。

翌日からの3日間、梅雨明けの猛暑でももちろんクーラーもない中、汗だくになりながら昆布結び、ホタテや昆布漁に使うロープ掃除を手伝った。最高気温35度、ひたすら同じことをする単純作業は意外に重労働だった。

作業中に聞いた長さんの言葉に驚かされた。「震災はプラスだった。震災によって南三陸という町を全国の人に知ってもらう機会になった。またボランティアの人たちとも出会えた」と仰っていた。長さんは津波

で漁船を失いはしたが、ご家族は全員無事だった。ご家族を失わなかったからといって震災がプラスであるはずはない。前を向こうと自分を奮い立たせるために自らに言い聞かせている言葉なのではと思った。

大川小学校や防災庁舎を見る機会もいただいた。大川小学校の生徒の多くは、川沿いに避難し津波に飲み込まれてしまった。やっとの思いで山に逃れた7名が目にしたであろう光景に思いをはせた。津波に襲われる恐怖、友だちが飲み込まれていく恐怖、何もできない恐怖。本当に恐ろしかったに違いない。遺族が裁判を起こしているが、震災は残された人々同士の気持ちをも引き裂き、分断させてしまった。

被災地は、東日本大震災によるところだけではない。突然命を失ってしまった人々がいる。苦しみを抱えながらも自らを奮い立たせ前を向き生きている人々がいる。家族や友人が共にいることのありがたさ、人々が協力し集うことの大切さ、なにより生かされている命を今生きていることを強く感じた。命は尊い。人の命を大切にし、助ける人生を歩んでいきたい。（高1 高橋悠大）



今回のボランティアでは、ボランティアを必要とする人のボランティアがメインであったが、当時のままにしてある施設を見に行ったりといろいろ考えることがあった。

僕は小学生の時に一度、車で被災地を見に行ったことがあった。その時は、津波から街を守る壁を造っていた記憶がある。また、ほとんどが仮設住宅であった気がする。今回行って思ったのは、復興は確実に進んでいるんだなということだ。仮設住宅は見た限りほとんどなかったし、昔より道路を10mかさ上げしたそうだ。道路や土地を10mも上げることがどれだけ大変で時間がかかることかは、想像すればすぐ分かるだろう。だが、進んではいるが、まだ工事している道路があったり、ボランティアを必要としている人がある。元通りになるには、まだまだ時間が必要だと思った。

今回は、3つの場所にボランティアに行った。最初にボランティアに行った漁師さんは、震災はプラスだったと言った。震災が起きて、復興のお陰で活気づいた店もたくさんあると、そう言っていた。すごい考え方だなと思った。失ったものもとても大きいですが、それをずっと引きずらずに、前を向いて生きている漁師さんがすごいと思った。この考え方は万人受けする考えではないのは、漁師さんも分かっていると思う。でも、それを僕らに真っ直ぐに伝えてくれた漁師さんの言葉はとても心の中に残った。

もう1つ心に残ったことがある。僕は今回のボランティアで、障がい児を見守る「にじのわ」という施設に行った。彼らは皆、素直でいい子だった。僕らと少し体が違うだけで学校にもなかなか行けないというのはとても残念だった。そしてその施設は仮設の建物だった。早くこの仮設の建物から変えてあげてほしいなと思った。

今回のボランティアは、僕にいろいろなことを考えさせてくれた。貴重な経験だったと思う。けれど、まだこれは一部分しか見ていないと思っている。だから、またボランティアに行きたいと思った。（高2 安藤俊輔）



私は先日、震災後初めて被災地へと足を踏み入れた。復興が始まり 10 年近くたとうとしている現在も、ボランティアは常に必要とされている。今回行った活動も決して楽なものではない。養殖に使われた道具の片付けも、2 人組でやっとできるようなことをいつも 1 人で行っているという。ここでどうすればこの状況が改善されるのだろうかという疑問が頭をよぎった。

今日、訪れた南三陸町は人口の減少が著しい。確かに地方では少子高齢化が加速しているが、震災はそこに一層の拍車をかけた。南三陸の完全な再生には今、日本全体が抱えている社会問題の解決が鍵となるかもしれない。

今回、現地で震災当初から現在まで活動しているボランティアスタッフの話聞くことができた。彼が教えてくれたのは、人と人との繋がりの大切さである。復興はどんなに頑張っても 1 人で行うことはできない。人びとが手を取り合うことではじめて成し遂げることができる。これはどんな問題を解決するときにも応用できるのではないだろうか。

初めて行った土地ではあったが、そこではたくさんの人の愛を感じることができた。私にとって南三陸はもはや第 2 の故郷のように感じる。4 泊 5 日という短い時間ではあったが多くのことを学ばせてもらった。これからこの経験を生かし、被災地はもちろん日本という国が「幸せ」という 2 文字に向かっていけるように身近なことから変えていきたい。

(高 3 白倉大晴)



今回、私が被災地支援に携わりたいと思ったのには、理由がある。それは、毎週土曜日に東京 YMCA 山手センターで行っている、ハンディキャップをもった小学生に水泳を教えるというボランティアを通じて、誰かに必要とされることの喜び、ボランティアがもたらす無限の可能性を感じ、自分にもできるボランティアの幅を少しでも広げたいと考えたからだ。

震災当時、私は小学二年生だったが、テレビで連日放送されていた津波の衝撃的な様子は今でも鮮明に覚えている。今回、地元漁師の方をはじめたくさんの方々から、津波によって一瞬にして尊い命がどれほど犠牲になったのか、ほんの少しの判断ミス、避難した場所のわずかな違いで生存率がどれほど違ったのか…という現場の「生の声」を聞き、津波がもたらした影響の悲惨さを改めて実感したとともに、被災した方々の復興への強い想いを感じた。

私のしているボランティアが子どもと関わるものであることもあり、3 日目に訪れたあさひ幼稚園での園児の見守りのボランティアは、

とても心に残っている。15 人の園児たちとヒーローごっこをしたり、おままごとをしたりと、時間が許す限り一緒に遊んだ。帰らなければならない時間になった時、私の隣にいた 1 人の園児が「もっとお兄さんとお話したかったのに」としょんぼりしていたのを見て、未熟な私でも園児の助けとなれたことを嬉しく感じた一方で、もっと遊んであげたかったと胸が痛かった。

5 日間にわたるボランティアは、総じてとても有意義なものだった。様々な現地の方々と交流したことで、メディアを通して知ること、感じるこのできないことをたくさん体験した。そして、これからも多種多様なボランティアに携わって、いろいろなことを学び、自分が人のためにできることをもっと増やしていきたいという思いが、一層強くなった。

(高 2 深作禅)



幼稚園でのボランティア活動

震災を経験した時、僕は小学二年生だった。そして今、高校二年生の夏を迎えた。当時とは背丈も考え方も大きく変わった。この時間は振り返って見れば、僕には長い時間だ。だが、初日に地震についての注意事項の説明を受けた時、ベース長の千葉さんは、東日本大震災のことを“この前の”と言った。僕は衝撃を受けた。僕たちがいろいろなことを学び、成長している間に、町は復興をとげていた。地震や津波の影はどこにも感じられなかった。しかし、学校管理下において戦後最悪の被害が出た大川小学校では、今でも裁判で争っている。原発だって解決していない。心の復興は、一部ではまだ途中なのだと思う。

だが、漁師の佐藤長治さんはそうではなかった。震災は大変だったが、それ以上に、ボランティアの方がたくさん来ることや、たくさんの人と知り合えたこと、困難な場面を前にして地域が前より活性化したことに喜んでいた。もちろん僕は震災などない方がよかったのではないかと思う。でもこれは何も経験していない僕の意見だ。長さんのように、震災を前向きに受け止めることは僕にはできない。おそらく南三陸の方全員がそうではないだろうが、ここに現地の方々の強さを見た気がする。

僕の好きなアーティストが、“被災地”という言葉が好きではないと、以前言っていた。理由は違うかもしれないが、僕もそう思う。というのも、その言葉は、震災があたかも人々や地域を二分してしまい、“かわいそうな人たち”に分類してしまうような気がするから。実際は全くそんなことはなかった。お邪魔した幼稚園の先生たちの家も流されてしまったらしい。そういった辛い過去を持ちながらも、みんな、前に進んでいた。僕たちが手助けをしに行くなんておこがましく、逆にその強い人々や地域のつながりから、辛い環境でも頑張ることの大切さや人の温かさを学んだし、エネルギーをもらった。今回このボランティアに参加して本当に心の底から良かったと思う。また機会があればぜひ参加したい。

(高 2 原田泰地)

